

		重点的に取り組む課題と目標	目標を達成するための活動計画	活動の成果・振り返り
西部	認知症関連	テーマ：認知症の方が参加できる居場所と、認知症の理解者を地域に増やしていく 【課題・背景】 地域のつながりを持ちながら住み慣れた地域で暮らしていくためには、当たり前認知症を受け入れ、見守りの目を持ちながら共生できる地域を作っていく必要がある。一方で認知症の在宅介護には、徘徊や虐待、消費者被害、近隣トラブルなど多岐にわたる問題が発生しやすい。それらの課題を解決するためには、地域にひとりでも多くの認知症理解者、協力者を増やしていくことが重要と考える。 【目標】 若年層から高齢者まで、幅広い世代への認知症普及啓発を行い、支え合いの仕組み作りをする。	・今までの活動で培ってきた担当エリア内学童クラブや小学校、児童館などのネットワークを生かして、更に認知症の理解を深めてもらうため、定期的に 講座を開催 する。 ・社会福祉協議会との協働、地域福祉推進委員会、民生委員との地区連絡会、福祉総務課主催のエリア別ネットワーク会議等を活かして、 学校や児童、子育てに関連するネットワークを広げていく 。 ・ 9月の認知症知る月間 において、担当エリア内で 講座やパネル展示を展開し、広く普及啓発に努める 。 ・包括内で作成している課題リストを活用しつつ地域特性やニーズを分析し、エリアや対象者を選定、 認知症ステップアップ講座を開催する。それをチームオレンジ立ち上げの足掛かりとする 。	若年層への啓発活動として、担当エリア内の以下の場所で読み聞かせを中心とした 子供向け講座を開催した 。若年層に対する啓発活動は、今後も対象者に合わせて楽しく伝えられる方法を考えながら行っていく。 9月の認知症知る月間では、 東寺方福祉館でのパネル展示や、地域の各グループに対して広く啓発を行った 。 12月にカフェナモンにおいて、 認知症ステップアップ講座を開催 。担当エリア内で初めての取り組みであり、当日は9名の参加があった。地域で支える側の人材のすそ野を広げていきつつ、 担い手の発掘を行い、最終的に通いの場の立ち上げやチームオレンジの結成に繋げていくことを目指す 。
	第2層生活支援 体制整備事業	テーマ：東寺方1丁目エリアを中心に介護予防や通いの場のニーズがあるかを調査し、実態把握に基づき新たな社会資源を開発して、高齢者のフレイル予防を目指す。 【課題・背景】 介護予防や通いの場のニーズ把握については、毎年重点エリアを設け、過去には百草エリア、和田既存エリアにおいて実態把握のもと、近所de元気アップトレーニングの立ち上げや説明会を行ってきた。地域課題やニーズをまだ把握しきれていないエリアとして、今年度は東寺方1丁目を中心に展開していく。 【目標】 東寺方1丁目エリアの介護予防や通いの場のニーズの把握のため、近所de元気アップトレーニングの説明会を開催し、地域の実態把握を行う。	・そのエリアでの 高齢者フレイルの実態や通いの場のニーズを、個別ケースを通して分析する 。 ・ 社会福祉協議会と協働し 、新たに使用可能な場所の確保や担い手がいるか等を検討する。 ・上記の作業を経て、 近所de元気アップトレーニングの説明会を開催し、地域のニーズや実態把握 を行う。	今年度は社会福祉協議会と地域課題や実態把握を行い、それに基づいて 落川エリア、東寺方1丁目エリアにおいて、近所de元気アップトレーニングの立ち上げ支援を行った 。 シルバーピア落川へ協力を要請し、団地内の団らん室を住民が集える場所として確保した。その上で4月に近所de元気アップトレーニング説明会を住民向けに実施し、新規団体の立ち上げに至った。 東寺方1丁目エリアにおいてはボンセジュール聖蹟桜ヶ丘と協議を重ね、施設内に住民が集える場所を確保。その上で2月に近所de元気アップトレーニング説明会を住民向けに実施し、新規団体の立ち上げに至った。 両団体へは立ち上げ後も、より良い活動になるよう継続支援を行っている。
東部	認知症関連	テーマ：認知症になっても安心して暮らせるまち作り支援 【課題・背景】 ① 高齢者の単身世帯や高齢者のみの世帯が増加し、軽度認知機能低下者の早期発見が難しくなっている。家族以外の近隣住民からの相談も多くなってきており、多世代に向けての認知症を理解し、互助力を高める継続的な普及啓発が必要になっている。 ② 昨年度、オレンジパートナーとのイベントや交流会を実施したが、認知症高齢者に対して個別での関わりは難しい状況。今年度もオレンジパートナーとの交流やイベントを通じて、チームオレンジとして具体的に出来ることを検討する必要がある。 【目標】 ① 認知症についての継続的な普及啓発を行うことで、自分事としてとらえることができ、 認知機能低下者の早期発見や互助力、相互理解を深める 。 ② オレンジパートナーと共に活動をしながら、認知症本人・家族との関わりを学び、 チームオレンジとして出来ることを検討する 。	① ・近トレや介護予防教室が、認知症になっても「慣れ親しんだ居場所」になるよう、また自分事として考えることができるよう、認知症月間に合わせて訪問し、継続的に認知症に関する講座や認知症サポーター養成講座を行う 。また 認知機能低下の気づきや支えあいの重要性について普及啓発を行う 。 ・多世代へ向けて認知症理解の普及啓発として、小・中・高校の生徒や自治会等への認知症サポーター養成講座を行う 。 ・認知症サポーター養成講座を受講した団体へは、各団体の状況に合わせた 認知症ステップアップ講座 を案内し、 開催する 。 ② ・エリア内のオレンジパートナーとの交流会を開催し、可能なサポートを聞き取り運用方法を検討する 。 ・認知症関連のイベントに共に参加し、活動していく。 ・認知症の本人、家族、オレンジパートナーとの認知症カフェを開催する。	①・R7年4月、5月、9月にご挨拶、認知症啓発として 各サロンや介護予防教室にて啓発活動を実施 。9月の認知症月間では認知症ケアバスが刷新されたため、簡易版を持参して啓発を実施。 ・聖ヶ丘小学校にサポートで活動しているオレンジパートナーより 子供向け認知症サポーター養成講座 を紹介していただき、 小学校4年生を対象に実施 。8月は東部地区の学童（5ヶ所）を訪問し、認知症の絵本の読み聞かせと工作（折り紙でオレンジリング作成）を実施。また認知症当事者へのメッセージをいただいた。 ・R6年度末に認知症サポーター養成講座を実施した 団体へステップアップ講座 を紹介したところ、実施を希望されたため開催。オレンジパートナー1名登録。 ・R8年2月に東部地区在住の住民向け 認知症サポーター養成講座と3月にステップアップ講座 をひじり館で開催。オレンジパートナー3名登録。 ②・東部地区在住の オレンジパートナー交流会は2回開催 。顔と名前を知っていただき意見交換を行った。「認知症カフェ」という形ではなく「認知症あってもなくても利用できるだれでもカフェ」の主催を提案するも「参加したいが、主催はできない」と挙手はなし。 今後オレンジパートナーが主催できるよう、まずは包括がゆいま〜る聖ヶ丘の食堂にて『ゆいま〜るカフェ』をR8年2月に開催。当事者、介護者、近隣住民30名以上の参加。地域交流も行うことができた。今後カフェ開催をすることで当事者や地域住民と交流を持ち、そこからまたつながりや課題、何らかの支援につながるよう支援していく。またオレンジパートナーが中心となり実行できるよう支援していく。 ・まだか永山の地域交流は2年目も開催できた。オレンジパートナーも回を重ねるごとに雰囲気慣れ、支援も円滑に行っていた。施設からも開催継続の要望を受けているため来年度も行っていく。
	第2層生活支援 体制整備事業	テーマ：諏訪4丁目都営団地の移転準備のための支援 【課題・背景】 諏訪4丁目都営団地（4-2-7～4-2-12）は、前年度に引き続き、建て替え後の移転を予定している。高齢者が多い地域のため、円滑な移転が出来るよう、高齢者の現状把握と必要な情報提供を行う必要がある。 【目標】 円滑な移転準備ができるよう、高齢者の現状やニーズを把握し、支援が必要な高齢者を抽出する。また顔の見える関係性を構築する。	・JKK、自治会、2層生活支援コーディネーターと連携し、 団地ごとの高齢者を抽出し、リストを作成し情報共有を行う 。 ・作成した リストの高齢者を対象に全戸訪問を行う 。その際に健康状態や移転に際しての課題、家族状況（支援可能な家族の有無）等の把握に努める。一度での聞き取りが難しい対象者の場合は、回を重ね関係性を構築していく。 ・聞き取りした内容により、情報提供を行う。 ・移転準備委員会が立ち上がった際には、参加し関係機関との情報共有と連携を図る。	当初、2026年2月に移転の予定であったが、工事の遅れや移転対象棟の再検討があり、 移転時期が令和9年の2月の予定と変更となった 。移転の棟が変更となる可能性があるため、 計画の実施が出来なかった 。令和8年の夏ごろに移転の棟に向けて通知を行う予定のため、来年度に向けて再度計画を再構築する。

	任意項目	テーマ：地域住民の「互助」による助け合い活動を推進することで、地域全体で高齢者の生活を支える体制づくり 【課題・背景】 ①独居、高齢者のみ世帯の増加、高齢化に伴う地域の互助力低下により、必要時に適切な見守り、支援に繋がることが難しい現状がある。 ②公的サービスのみでは賄いきれない地域ニーズがあり、現状ではニーズを充足できるフォーマル・インフォーマルサービスが不足している。 【目標】 ①地域住民が地域課題を自分ごととして捉え、将来に向けて住民自身が備えられるよう、意識づけができる。 ③ 地域ニーズを把握し、マッチングができるよう、世代、分野問わず、地域活動の情報を得る。	①・地域活動等へ訪問した際に生活支援体制整備事業についてPRを行う。 ・近トレ等既存の活動に訪問し、通いの場継続支援を行う。 ・団体訪問時には把握している社会資源や制度説明、他団体の活動例など、ニーズに応じた情報提供を行う。 ②・自治会、サロンや自主グループ等へ訪問し、団体の情報を得る。適宜アンケートも活用しデータを纏める。 ・地域課題調整会議や地域ケア会議を活用して、挙げられたニーズを他会議体にて検討する。 ・包括、1 層コーディネーター、社協地域福祉コーディネーター等と連携し、地域活動について円滑な情報共有を図る。	①地域の活動団体を訪問し、聞き取りやアンケートを行った。また社会資源や生活支援体制整備事業等についてPRを行った。 ②自治会、サロンや自主グループ等へ訪問し聞き取りやアンケートを行い情報収集を行い、データをまとめた。 住民からのニーズに基づき、2か所で近トレの開設支援を行った。 地域課題調整会議や地域ケア会議から抽出された地域課題を包括、1 層コーディネーター、社協地域福祉コーディネーター等と連携し、オープンカンファレンスにて検討を行った。
セ ン 多 タ 摩 ー	認知症関連	テーマ：認知的フレイルに理解のある地域づくり 【課題・背景】 ・エリア内には通いの場が多くあるが、認知症を発症すると、利用の継続が困難になったり、団体側の受け入れが出来なくなることがある。 ・自治会等住民組織の中でも認知機能が低下した人への対応に苦慮することが多く聞かれる。 ・住民活動の中で認知的フレイルを自分事として捉えられるような取り組みや、知識の習得、普及啓発の必要性が増している。 ・認知症施策とも連携しながら活動をしていく必要がある。 【目標】 元気なうちから認知的フレイル予防活動に取り組み、認知症になってもお互いに助け合える地域づくりを行う。	・近トレは認知力アップトレーニングや近トレPlusが導入されることとなったため、既存の近トレ団体やそれ以外の自治会・サロン等の団体、新たな地域に働きかけを行う。 ・地域資源の把握・整理を行う中で、認知症地域支援推進員とも協働しながら、認知症の基礎知識の普及啓発を実施する。興味を持つ団体には認サボや近トレなど実施できる支援メニューを提示、相談できるようにし、支援が行えるようにする。 ・自治会、管理組合等の担い手の不足や高齢化、役割の兼務が課題となっている為、多世代交流を検討。若い世代を巻き込むことで、新たな担い手の発掘や地域の活性化にも繋げていく。	【成果】 ・2層生活支援コーディネーターと同行し地域のサロンや自治会等の団体へ訪問し、認サボの案内等普及啓発活動を行った。 ・上記活動の影響もあり、認サボや認知症の勉強会は年間 1 2 件実施、内半数以上が新規団体であった。 ・認知症サポーター養成講座ステップアップ講座についても、圏域内で 2 件実施、より具体的な地域での取り組みの検討や、オレンジサポーターの登録者数増加に繋げることができた。 ・圏域内 2 か所の認知症カフェ（からきだ匠カフェ、ふらっとカフェ）にそれぞれ毎月参加し、参加者交流や個別の相談等に応じた他、企画運営や主催者からの相談等にも応じている。 【振り返り】 2 層生活支援コーディネーターとの協働により、新規での勉強会も多く実施できた。オレンジパートナーとも連携し交流会や今後の活動に向けた動きも共有しており、今後の展開が期待できる。
	第2層生活支援体制整備事業	テーマ：ひとりひとり望む生活ができる基盤づくり 【課題・背景】 ・高齢化率が5 0 %に迫る地域がある。（落合 4 丁目 鶴牧 4 ・5 丁目） ・後期高齢者・高齢者世帯や単身高齢者が増えている。 ・地域ごとに課題が違う。よって課題を把握し、社会資源開発をする必要がある。 ・住民が望む生活を継続するためには身近な地域での自助力、互助力が必要。 【目標】 高齢化が進んでいる地域を中心に、ひとりひとりの望む生活ができるための社会資源は何かを把握し、地域や関係者と必要な社会資源開発を行う。	・自治会、管理組合、地域の団体などに出向き、地域福祉コーディネーターと連携し地域のニーズ調査・課題抽出を行う。 ・介護予防教室や交流会などを関係機関と連携し、自助・互助力の醸成を図る。 ・個別ケースから得た情報を包括内で共有し、地域としての視点を持ち地域課題を抽出し、課題にあった会議体につなげる。 ・小地域で行われている近トレや自主グループ、自治会等の現在ある活動が継続できるよう支援する。地域での資源開発は地域の意向に沿った伴走支援を行う。	【成果】 ・社協のCSWとも連携しながら自治会、管理組合、サロンや自主グループに訪問し調査を実施することが出来た。 ・介護予防教室での認知症サポーター養成講座開催やサロンでの生活支援体制整備事業の講座を実施するなど、セルフケアや互助力の土台作りを実施。 ・地域課題調整会議を2回開催。抽出した地域課題についてはSC定例会へ繋げることが出来た。 ・地域で活動しているグループを訪問し、実態把握と活動継続のための支援を実施。また、エースト落合では見守りを目的としたサロン活動の創出に至った。 【振り返り】 地域活動の実態把握として、今まで繋がりの薄い団体とも繋がれた。土台作りが少しずつ進んでいるので、継続して関係性の構築と必要な社会資源の開発を行っていく。
	認知症関連	テーマ：認知症があってもなくても地域の資源を利用し生活できる支えづくり 【課題・背景】 高齢化率の上昇と比例して、独居高齢者、高齢者のみの世帯も増えている。その中で認知症を発症するケースも増えている。住み慣れた地域で、これまでのつながりを継続しながら、地域の見守り支援があれば、認知症になっても一人暮らしを続けることができるケースがある。 【目標】 ・多世代に向けて認知症の普及啓発を行い、地域における認知症理解を深める ・オレンジパートナーと共に、地域での支え合い（互助）活動を検討する会議体を形成する	・若い世代を含めた多世代への認知症啓発の方法を検討する。 ・学童クラブ等への働きかけを行い、子どもや現役世代に向けた認知症サポーター養成講座する ・豊ヶ丘図書館や豊ヶ丘福祉館と連携して、ステップアップ講座を開催する ・認知症月間には、住民向けに普及啓発のイベントを行う ・永山団地名店会のイベントに合わせて普及啓発を行う ・チームオレンジの結成に向けて働きかけていく。	【成果】 ・貝取小学童クラブを対象に認知症を正しく理解するための普及啓発イベントを行った。 ・瓜生小学校4年生児童を対象に認知症サポーター養成講座を行った。 ・豊ヶ丘図書館と連携し認知症を正しく理解するための普及啓発パネル展示を行った。 ・豊ヶ丘福祉館にて認知症サポーター養成講座とステップアップ講座を行った。 ・9月の認知症月間に市民向けにオレンジフェスを実施した。 ・永山団地名店会イベントで認知症とともに生きる希望宣言のパネル作成展示を行った。 ・チームオレンジを2つ形成した。 【振り返り】 今年度は多世代へ向けた認知症を正しく理解するための普及啓発活動を実施することができた。また、チームオレンジ形成し、オレンジパートナーによる認知症カフェと、本人を中心におしゃべりの会が発足した。これらを「市民の集える場所が必要」という地域課題に応える場所として発展させていきたい。

中部	体制整備事業 第2層生活支援	テーマ：独居高齢者や身寄りのない高齢者が、住み慣れた地域で、安心して過ごせる地域の基盤づくり 【課題・背景】 中部包括が担当するエリアの高齢化率は41%を超えており、その中で高齢者単身世帯は22%、高齢者のみ複数世帯数は18.5%＊1である。多岐の事情により、身寄りのない高齢者も増加している。将来、病気や介護が必要になったときに、自分らしく暮らす（生きる）ために、どんなことを考えて備えれば良いのかを知ること、より安心して、今を暮らす（生きる）ことにつながる。 そのためのACP（人生会議）の普及啓発が重要である。 （＊1 令和5年4月1日住民票台帳より引用） 【目標】 ・ 地域住民に対してACP（人生会議）の出張講座を行う	・自治会、管理組合、サロン等で自助（備え）の視点で、 ACP（人生会議）の普及啓発講座を行う ・地域交流スペース及び新規通い場へ パネル・冊子等の展示による普及啓発 を行う ・2層生活支援コーディネーター、見守り相談窓口、地域福祉コーディネーター（社会福祉協議会）と連携し、地域ニーズを把握する ・ 救急キットの普及啓発	【成果】 ・2層生活支援コーディネーターにより、自治会・管理組合からニーズ把握し、依頼を受けた 豊ヶ丘地域の集会所で、ACP講座を下半期に実施。多摩市作成のACP冊子を活用し講座を行った。 ・講座の中では、介護予防の重要性の説明と共に、ミニ体験講座として介護予防体操も組み込んだ。 ・講座終了後には多摩市と東京都が作成した冊子を家族や知人にも渡したいとの意向があり参加人数以上の冊子をお渡し普及することができた。 【振り返り】 ・認知症や権利擁護の出張講座、コミュニティセンターの文化祭など、あらゆる機会に冊子等の展示や案内をして普及啓発を行ったが、次年度は、より掘り下げた内容でACP講座を開催していきたい。
	任意項目	テーマ：身近な住民同士の助け合い、見守り合いの基盤づくり 【課題・背景】 中部包括が担当するエリアにはサロンや近トレなど既存の通い場が多くある地域であるが、地域の担い手も高齢者化し、後継者が見つからず、継続が難しくなる通い場もある。同様に民生委員不在の地域が複数ある。 身近な住民同士の助け合い、見守り合いの互助、自助の重要性が高くなっている。 【目標】 ・ 民生委員不在地域を中心に、ニーズ把握と課題抽出し、自助・互助の基盤づくり	・民生委員不在地域の自治会、管理組合、サロン等で 自助・互助の重要性を啓発する交流会や出張講座を実施する ・交流会や出張講座を通して、地域ニーズの把握、地域課題を抽出する ・見守り相談窓口、地域福祉コーディネーター（社会福祉協議会）と連携し、 地域課題を踏まえた、多様な通い場を創出する。 ・民生委員不在地域のニーズ把握の調査を行う ・災害対策の視点で自治会、管理組合等のニーズ把握を行い、 住民同士の見守り・支え合いの基盤づくりを地域福祉コーディネーター（社会福祉協議会）と連携して実施する	【成果】 ・第2層生活支援コーディネーターが中心になって、 自治会、管理組合、サロン等 へヒアリングをする中で、その地域の高齢化率などの客観的情報を伝えて、 自助・互助の重要性を発信することに努めた。 ・今年度は管理組合から依頼を受けて、ニーズに合わせて出張講座を開催。 複数回に渡りグループワークや出張講座を開催し 、アンケート調査にて課題抽出と課題解決のための方法を検討。 近トレ立ち上げ支援につなげた。 ・地域福祉コーディネーター（社会福祉協議会）と連携して 民生委員対象の連絡会で防災対策の視点で72時間ゲーム やその後について検討。 住民同士の見守り・支え合いの基盤づくりの取組 ができた。 【振り返り】 ・民生委員の任期交代があり、新任民生委員との新たな関係性構築の重要性を感じた。そのため、不在地域に限らず、民生委員と共に自助・互助の基盤づくりについて検討する機会を設けたことは、有意義であった。次年度以降を民生委員と共に身近な住民同士の助け合い、見守り合いの基盤づくりについて考えていきたい。
北部	認知症関連	テーマ：認知症の方への地域の理解と互助、集える場づくり 【課題・背景】 高齢化が進行し認知症に関する相談が増えている中で、認知症になっても安心して暮らし続けられる共生社会の実現に向けた地域づくりが必要とされている。 そのためには、地域住民の認知症の方への理解と互助、認知症の初期段階で孤立しないように地域で集える場などの地域づくりが重要である。 【目標】 認知症の方への理解を地域住民に深めてもらう。地域の互助により認知機能が低下しても地域で集える場を継続していく。	・認知症を知る月間に向けて普及啓発を含め サロン・近トレなど訪問にてミニ講座を実施 。また、多世代への普及啓発に向けて地域福祉推進委員会ですつながりのある 児童館、学童クラブ、中学校に認知症サポーター養成講座の開催についてアプローチ していく。 ・永年の活動により定着した「すみれカフェがお」、R6年に立ち上がった「カフェあたご」の2か所の 認知症カフェについて、出張相談も兼ねて参加しながら支援 していく。 ・昨年度に認知症サポーター養成講座を実施した「すみれカフェがお」から ステップアップ講座 の希望もあり、西部包括と合同にて 企画実施 。その他、チームオレンジとなる可能性のある団体へアプローチしながらチームを結成していく。 ・つむぎ館での 元気チェック＆やさしい脳トレからの自主グループ化 （認知力アップトレーニングver.）も見込み、つむぎ館での説明会の開催を検討。	・認知症カフェや認知症を知る月間を中心にイベントや 近トレ団体へのミニ講座を実施 。オレンジリング工作を通じて、多世代への普及啓発として 子どもとその親世代にアプローチ 、当事者の参加、近トレ団体へミニ講座後にリング配布など実施。 ・ すみれカフェについては法人内で検討し今年度で活動休止 。場を提供してくれた喫茶店については今後も地域の見守りの拠点として関わりを継続。カフェあたごについては、高齢者（認知症の当事者）やオレンジパートナーだけでなく、就労Bの利用者など参加もあり、 地域共生の場として展開の可能性あり。今後も支援継続 していく。 ・ステップアップ講座については上記2か所の認知症カフェにて実施。カフェあたごでは オレンジパートナーによる送迎のサポートなどチームオレンジ的な互助の意識 ができてつある。 ・つむぎ館での説明会を実施したが、やさしい脳トレのメンバーからの参加はなく自主グループ化には至らず。
	体制整備事業 第2層生活支援	テーマ：地域の見守りネットワークの構築 【課題・背景】 地域の特性として、駅近隣は利便性が高く高齢になっても自立した生活が継続しやすいが困った時に地域とつながりがなく相談できない、民生委員の交代や欠員が多い地域もあり。身近な地域での見守りの重要度が増している。 地域での見守り体制の構築と、困った時に相談しやすい環境を整備していくことが必要である。 【目標】 民生委員、地域住民、社協、見守り相談窓口、地域の企業などとの協働により顔の見える関係づくりから、 地域の見守りネットワークを構築 していく。	・民生委員や見守り協力員との地区連絡会をエリア別に開催。地域での日常的な見守り活動に役立つ配食サービスの紹介や栄養の講座、早期の対応が重要である認知症について 講座等と事例紹介やグループワークでの情報交換を通じて民生委員や見守り協力員との連携強化を図る。 ・愛宕4丁目の移転した 都営団地について 、移転後に住民からアンケート実施し、住民同士の つながり を望んでいることが確認できた。その結果を元に住民との話し合いを行い一緒にできることを検討し実施に向けて進めていく。 ・地域の見守り活動の最前線でもある配食サービスと地域と密接している 民生委員との情報共有の場を持ち、【食の確保】と【見守り】をテーマに見守りネットワークの構築 を図る。 ・認知症カフェでの出張相談、圏域内で活動している通いの場の訪問、地域福祉推進委員会の参加などにより、 顔の見える関係をつくり身近な相談窓口として包括の周知を図りネットワーク構築 を図る。	・ 民生委員との地区連絡会について、第1エリアは8月と1月に実施 。上半期では配食サービス事業者との情報交換や見守り事例紹介、下半期は管理栄養士を講師に招き講座を実施。いずれもグループワークで積極的な意見交換が行われ、日常の緩やかな見守りにより早期発見や支援につながることを共有。 第5エリアは11月に実施 。民生委員の欠員が多く少人数ではあったが活動状況など相互に情報共有。認知症や高齢者虐待についての勉強会を行い 今後の連携について確認 できた。 ・愛宕4丁目の都営団地について、自治会との協議から 住民主体で集会所開放デーを月例で開始 し、その後に麻雀や輪投げなど自主グループも派生。その後、メンバーが固定化し広まらない課題みられ、 わがまちミーティングを開催し地域のコミュニティ再生について協議 。緩やかなつながりづくりが必要であることを共有し、 次年度に食を通じたイベントを行うことが決まった。 ・地区連絡会にて 民生委員と配食サービス事業者との情報共有の場を持ち、見守りネットワークの強化 ができた。